



2024 年インドネシア大統領選挙：プラボウォはいかに勝利したか

本名 純

(立命館大学国際関係学部・教授／国際地域研究所・運営委員)

はじめに

2024 年は選挙イヤーである。とりわけ世界の「3 大民主主義国」であるインドネシア、インド、米国で、国家リーダーを決める選挙が行われる。2000 年代後半から「民主主義の後退」がグローバルなトレンドとなっている中、この 3 国で行われる今年の大規模選挙は、民主主義の展望や国際政治の行方にどう影響するのか。そのような関心が高まる中、インドネシアが 2 月 14 日に大統領選挙を実施した。有権者約 2 億 500 万人が直接投票で大統領を選ぶ民主主義の祭典である。そして、10 年の任期を努めたジョコ・ウィドド（通称ジョコウィ）大統領の後任を決める選挙である。その選挙の結果は、プラボウォ・スビアント候補（国防相）の圧勝となった。プラボウォはいかにして勝利を手に入れたのか。その選挙はインドネシアの民主主義にどのようなインパクトを与えたのか。

今回の大統領選は、3 名の候補によって競われた。前ジャカルタ特別州知事のアニス・バスウェダン候補、前中部ジャワ州知事のガンジャル・プラモノ候補、そしてプラボウォである。州知事時代のリーダーシップをアピールする 50 代半ばのアニスとガンジャルに対し、政界の長老で三度目の立候補となる 72 歳プラボウォの挑戦という構図になった。それぞれが正副大統領候補のペアを組み、昨年 11 月末からの選挙戦を繰り広げた。事前の世論調査では、2023 年 4 月まではガンジャルの支持率が最も高く、プラボウォがそれを追うレースだったものの、その後は拮抗するようになり、同年 11 月からはプラボウォ支持が急上昇し、選挙直前には 50%を上回った¹。とはいえ、三つ巴の戦いなので、誰も得票率 50%に届かず、上位 2 候補の決選投票が予定されている 6 月まで次期大統領が決まらない可能性も大いにあった。しかし蓋を開けてみれば、プラボウォは 58%の得票率を確保し、第一ラウンドで勝利を決めた。プラボウォの 3 度目の挑戦は、なぜ成功したのか。

リブランディング

第一の要因は、プラボウォ・イメージのリブランディングである。プラボウォといえば、スハルト独裁時代のエリート軍人で、当時のスハルト大統領の娘婿として特権的な地位にいた。東ティモールや反スハルト民主化運動の弾圧で、人権侵害への関与も指摘されてきた²。その彼は、2014 年と 2019 年の大統領選挙では「ストロングマン」を売りに、右翼ポピュリストの選挙を展開し、二度と

¹ Indikator Politik Indonesia, “Peta Elektoral di Akhir Masa Kampanye: Satu atau Dua Putaran?” Temuan Survei Tatap Muka Nasional: 28 Januari – 4 Februari 2024, p.41.

² Gerry van Klinken, “Prabowo and human rights,” *Inside Indonesia*, April 27, 2014. Commission for Reception, Truth, and Reconciliation Timor-Leste (CAVR), “Chega! The Report of the Commission for Reception, Truth, and Reconciliation Timor-Leste,” 2005.

もジョコウィに敗北する³。その後、ジョコウィは自らの権力基盤の拡大のためにプラボウォを政権に引き込み、2019 年からの第 2 期政権で国防相に任命した。これが、途絶える寸前だったプラボウォの政治生命を延ばし、「ジョコウィに最も忠誠を尽くす大臣」として自らを新たに売り出すきっかけを作った。

そこから彼のリブランディング戦略が本格的に始まる。「ストロングマン」からソフトな「ジョコウィ信奉者」、そして「カワイイおじいちゃん」に変わっていく。その過程において、オープン AI を駆使した画像生成でプラボウォをアニメ化し、そのアバターが軽快にポップに踊りだす動画が TikTok に大量放出された⁴。プラボウォ選対は、動画クリエイターや SNS のインフルエンサーを多数抱え込み、「プラボウォ・ダンス」を一緒に踊る街角の人々を次々と TikTok に流すことで、政治メッセージの極めて薄い選挙キャンペーンを展開していった。TikTok のアルゴリズムは他の SNS より早くバズる特徴と、Z 世代とミレニウム世代が全有権者の 56% を占めるインドネシアの選挙市場の特性を見据え、プラボウォの過去にアレルギーのない、若くて政治的関心の薄い有権者層を主に狙ったマーケティングである。過去 2 回の選挙のように、偽情報やヘイトで分断を煽るのではなく、「楽しくインクルーシブ」なムードを全面に出した。この生成 AI によるリブランディングと「ゆるい選挙戦」の効果は大きく、投票後の世論調査は、Z 世代とミレニウム世代の 6 割以上がプラボウォに投票したことを示している⁵。

ジョコウィ支持層の動員

プラボウォ勝利の第二の要因は、ジョコウィの挺入れである。約 2 年前、2022 年 4 月の世論調査では、プラボウォの次期大統領として支持率は 30% に留まっていた⁶。当時、人気が高まっていたのがガンジャル中部ジャワ州知事であった。それを煽ったのがジョコウィで、彼は同年 5 月に中部ジャワ州で行われたジョコウィ支持者の集会で、「この中に我々の候補者がいるかも」と発言し、その場にいたガンジャルへの支持を匂わせた⁷。このメッセージは、大衆レベルで根強いジョコウィ・サポーターたちに広がり、ガンジャルは同年 9 月に支持率 36% で世論人気のトップに躍り出た。

しかし、同年 10 月にアニスの立候補が決まると、反ジョコウィ勢力がアニスを盛り立てた。その結果、翌月の世論調査でアニス支持がガンジャル支持に迫るまで接近した。アニスが勢いづくことを警戒したジョコウィは、今度はプラボウォに挺入れすることで、アニスを支持率 2 位の座から引きずり降ろそうと画策する。最後はガンジャルとプラボウォが正副大統領として組めば、アニスとの勝負は一発で決まるとジョコウィは確信していた⁸。当然ジョコウィは、その大連立を自分が主導することで、次期政権の立役者として影響力を残そうと考えていた。そのため、ジョコウィはガンジャルとプラボウォを両天秤にかけて、自分の草の根サポーターたちが両方を支持するように仕掛けていた。プラボウォと一緒に各地を訪問するジョコウィの姿が SNS に出るたびに、ジョコウィは

³ Edward Aspinall, “Oligarchic Populism: Prabowo Subianto’s Challenge to Indonesian Democracy,” *Indonesia*, No.99, April 2019, pp.1-28.

⁴ “Joget Gemoy Prabowo demi Pemilu Muda,” *Majalah Tempo*, January 7, 2024. “From military leader to ‘harmless grandpa’: the rebranding of Indonesia’s Prabowo,” *The Guardian*, January 9, 2024. “Generative AI may change elections this year. Indonesia shows it,” *Reuters*, February 8, 2024.

⁵ “Survei Indikator: Pemilu Prabowo Banyak dari Gen Z dan Milenial, Pemilu Ganjar Didominasi Kalangan Tua” *Kompas.com*, February 21, 2024.

⁶ Indikator Politik Indonesia, op.cit.

⁷ “Sekoci Untuk Gubernur,” *Majalah Tempo*, June 4, 2022.

⁸ “Ganjar-Prabowo or Prabowo-Ganjar? Ruling Coalition Seeks Golden Ticket for 2024,” *The Jakarta Post*, March 14, 2023.

プラボウォも支持しているというメッセージが伝わった。そうかと思えば、同年 11 月には、「白髪になるまで国のために努力する人を支持すべきだ」と政治集会で発言し、やはりジョコウィは白髪のガンジャルを後継者だと示唆して見せた。その上で、2023 年の 3 月、ジョコウィはガンジャルとプラボウォの両者を引き連れて中部ジャワ州クブメン県の田園を訪れ、二人がペアを組む話をする環境まで整えた。

しかし状況が変わる出来事が同年 3 月末に起きた。ジョコウィとガンジャルが所属する闘争民主党の党首であるメガワティ元大統領が、突如、国内で同年に開催される予定であった国際サッカー連盟（FIFA）の U-20 ワールドカップに関して、イスラエルの参加を認めないという外交方針を主張し始めた。中東問題でパレスチナ支持を掲げてきたインドネシアの歴史に照らして、当然の主張だとメガワティは説明する。しかし、インドネシアのサッカーファン人口を大きく、彼ら（とくに若い世代）の期待を背負ってワールドカップ開催の実現にこぎつけたジョコウィにとっては、メガワティの主張はスポーツに政治を持ち込む悪い象徴であり、あくまでも開催を貫こうとした。ところが大会の開催予定地である中部ジャワ州の州知事であるガンジャルは、ジョコウィ路線ではなくメガワティ党首の方針に賛成を示し、同州にイスラエル・チームは入れないと訴えた。これが直接の原因で FIFA はインドネシアの大会実行資格を剥奪した。ジョコウィにとっては、ガンジャルに裏切られた形になり、ガンジャル不信を募らせる決定的な契機となった⁹。逆にメガワティにとっては、ガンジャルがジョコウィよりも党首としての彼女に忠誠心を持っていることを確認する重要な機会となった。

そして翌月の 4 月 21 日、メガワティは大統領選挙へのガンジャルの出馬を発表する。ジョコウィは直前まで、その決定を知らされておらず、しぶしぶ出馬会見の場に参加するものの、一人だけ党のカラーである赤い服ではなく黒のバティックを着て現れた。不服を示す彼なりのジェスチャーである。メガワティは、ガンジャルの立候補を決定するや否や、彼に対して、大統領に当選した暁には党が指示する政策を実施することや、党が閣僚人選も決めるなどの約束を交わすことを求めた¹⁰。ガンジャルのパトロンは自分であるというメガワティの権力意識と、ガンジャル自身もメガワティの束縛から逃れられない様子を横目に、ジョコウィも次第にガンジャルとの距離を置くようになる。「ガンジャルは党のカラーを薄めない」と他党支持層の票は得られないし、それでは選挙に勝てない」と呟いた¹¹。

そのジョコウィとガンジャルの間に出来た隙間に食い込んできたのがプラボウォだった。自分こそがジョコウィ路線の正当な継承者であることをアピールするために、自らの出馬を支持する政党連合を「チーム・ジョコウィ」と呼び、ジョコウィ政権の内閣の名称である「インドネシア前進内閣」を引き継ぐための「インドネシア前進連合」と命名し、ジョコウィの引退後も彼を次期政権で重宝するラブコールを送り続けた。極めつけに、ジョコウィの長男のギブラン（ソロ市長）を副大統領候補に据えることで、ジョコウィの信頼と選挙での支持を確保できると読んでいた。「もう 4 回もギブランをくれとプラボウォから懇望されたが、一貫して断ってきた」とジョコウィは苦笑した¹²。

⁹ Andi Widjajanto（ガンジャル選挙対策チーム幹部）との会話、2024 年 3 月 9 日。

¹⁰ “Benarkah Kontrak Politik Ganjar Pranowo-Megawati Bikin Jokowi Marah?” *Bocor Alus Politik*, May 26, 2023 <https://www.youtube.com/watch?v=zKVC0y0CoGw>. “Penyebab Jokowi Hendak Cawe-Cawe di Pemilu 2024,” *Majalah Tempo*, June 4, 2023.

¹¹ Jokowi 大統領へのインタビュー、2023 年 6 月 22 日。

¹² Jokowi 大統領へのインタビュー、2023 年 8 月 11 日。

しかし、ガンジャルへの影響力が薄れていくなか、ジョコウィはプラボウォに投資して引退後の保険をかける選択しかなくなっていた。どのようにプラボウォに勝たせるか。ジョコウィは、それまでプラボウォの副大統領候補にエリック・トヒル国営企業大臣をつけることがベストなシナリオだと見ていた。なにより自分の右腕であるだけでなく、大富豪のトヒルであれば、選挙資金も潤沢であるし、最大票田である東ジャワ州での票獲得に重要な役割を果たすイスラム社会組織「ナフダトゥル・ウラマー」(Nahdlatul Ulama: NU)との関係も密にさせてきたため、NU の選挙サポートも期待できる。ただ、トヒルは国民信託党(PAN)に所属していることが、最後の段階でプラボウォを擁立する政党連合のコンセンサス作りを難しくした。なぜなら、連合内の党首たちは、副大統領候補を特定政党から出せば、その他の党の党首たちの面目が立たないというジレンマに直面していた。そのため、PAN 以外はトヒルを副大統領候補として受け入れられないという態度を明らかにし始めた。こうして、また徐々にジョコウィの選択が狭まっていった。

そして 2023 年 10 月、いよいよ息子のギブランというシナリオが現実化する。そもそも選挙法では、正副大統領選挙への立候補資格は 40 歳以上となっており、36 歳のギブランには選挙への参加資格はなかった。しかし、その法律を無効化する政治工作が行われた。ギブランの叔父が長官を務める憲法裁判所が、その年齢制限を無理やり緩和し、ギブランの副大統領としての立候補を可能にしたのである。それに対して、都市中間層のリベラル市民は「縁故主義で民主主義が危機に晒されている」とジョコウィを猛烈に非難するものの、一般大衆には、その危機感よりも若干 36 歳のギブランが「若者の声」を政治に反映させるという期待感が上回っていた。そういう世論調査の分析を見て、ジョコウィはギブランの出馬にゴーサインを出した。ギブランがプラボウォの副大統領候補になったことで、ジョコウィ・サポーターたちのプラボウォ支持もより強固となり、その結果、10 月に 37%ほどだったプラボウォの世論支持率は 12 月には 45%まで上昇し、ガンジャルやアニスとの差を大きく広げていった。こう振り返ると、いかにジョコウィ効果がプラボウォの支持率アップに決定的だったか理解できよう。

国家リソースの動員と政府の非中立

しかし、世論調査で示す 45%の支持率では、ジョコウィ周辺は不安を抱いていた。それは、どの候補も 50%の得票率を超えない場合、決選投票を上位 2 組の候補で 6 月に行う予定になっていたからである。決選投票になった場合、世論調査ではプラボウォとアニスが争う可能性が濃厚であった。そのシナリオ通りに進んだ場合、選挙戦がさらにヒートアップしていくことが予想され、それは当然、市民社会勢力がジョコウィのプラボウォに対する加担を批判する機会を増していくことにつながる。それによってジョコウィがこれまで維持してきた高い世論人気が低落し、求心力を失う可能性さえある。そのリスクを避けるためにも、2 月の選挙で勝負がつくことが必須となった。いかに 45%を短期間で 50%超えまでブーストさせるか。そのミッションが、プラボウォ勝利の第三の要因となった。すなわち、大統領の音頭で選挙直前に集中的に行った国家リソースの投入であり、アメとムチを大規模に動員したプラボウォへの投票誘導である¹³。この効果が、支持率 45%からの 50%超えのミラクルを可能にしたと思われる。

具体的には、ガンジャル支持層の切り崩しがターゲットとなった。アニス支持層は、反ジョコウ

¹³ 詳しくは、“Gerpol Masif Dukugnan Kepala Desa,” *Koran Tempo*, 13 February 2024; “Operasi Senyap Menangkan Prabowo,” *Koran Tempo*, 14 February 2024 を参照。

イ意識が強固であり、切り崩しは難しい。ガンジャル支持層であれば、闘争民主党党员を中心に、ジョコウィ支持層と重なる部分も大きい。そこを奪い取る戦略をベースに、大票田である西ジャワ州、中部ジャワ州、東ジャワ州をターゲットに、とりわけガンジャルと闘争民主党の地盤である地域をピンポイントに、ジョコウィが直々に村落を訪れ人々にコメなどの生活支援物資の配給を行った。このバラマキ効果は絶大で、選対スタッフたちは、ジョコウィ政権を継ぐプラボウォが当選すれば生活支援も続くと村民を説得して回った。

アメと同時にムチも効果を発揮した。これはジョコウィの右腕でもある国家警察長官が指揮を取った。上述の地域では、地元警察が各地の村長たちを訪れ、村落財政の報告書を持ち出し、不正会計の可能性を匂わして汚職調査の発動を示唆していた。その上で、「選挙が第一ラウンドで決着すれば調査は止まる」と囁き、プラボウォ票 50%超えへの「協力」を持ちかける¹⁴。こういう工作の実態が、数多く報告されている。このようなアメとムチのドーピング効果で、プラボウォ支持率は選挙直前にブーストされ、投票日の得票率 58%を叩き出したのである。闘争民主党の地盤である中部ジャワ州やバリ州、北スマトラ州で軒並みガンジャルは敗北した。彼の生まれ故郷である中部ジャワ州カラナンヤル県でさえプラボウォに負けた。

2 月 14 日の選挙の後、アニス陣営とガンジャル陣営は、選挙に大規模で組織的な不正があったとし、憲法裁判所に選挙結果に関する異議申し立てを行った。その判決が 4 月 22 日に発表された。両陣営の異議申し立ては、ギブランの出馬を認めた憲法裁判所の決定に大統領の関与があったとする点や、大統領の生活支援物資の配給がプラボウォ票への誘導になったという点、さらに国家機構がプラボウォの勝利にテコ入れしていた点を訴えたものの、憲法裁の判決では、すべてにおいて、主張を説得的に証明するだけの法的証拠が認められないということで、異議申し立ては却下された。しかし、8 人の判事のうち 3 人が「反対意見」を表明した。3 人の反対意見では、生活支援物資の政治的な分配や大統領の中立性には確かに疑いが見られるとし、北スマトラ州やジャカルタ、西ジャワ州、中部ジャワ州、東ジャワ州、バリ州などで選挙のやり直しをすべきだと訴えた。インドネシアで 2004 年から始まった直接大統領選挙の歴史で、選挙結果が憲法裁の判決を受けることはこれまでもあったが、判事のなかで反対意見が出たのは初めてである。しかも 8 人中 3 人で、もうひとり反対したら判決が真っ二つに割れるギリギリの状況となった。

終わりに

このような 2024 年大統領選挙から何が見えてくるか。第一に、憲法裁での議論に象徴されるように、1998 年の民主化後、今回が最も公平・公正に欠ける選挙になった。そしてその主要な原因は、ジョコウィの権力闘争の産物だといえる。彼は、今年 10 月で 2 期 10 年の大統領任期を満了する。政党の党首でも社会組織のリーダーでもない彼にとって、退陣後の権力喪失は、自分と家族の今後の身辺保証に直結する懸念となる。しかも彼には世論の強力な人気がある。その政治資本を使って次期政権の立役者となり、退陣後の政治影響力を維持しようと考えて不思議ではない。

ジョコウィは 2 年前に、憲法改正で 3 期目続投の可能性を模索した。これは失敗に終わった¹⁵。次に試みたのが、新型コロナウイルスの感染拡大を理由にした選挙延期シナリオで、これも不発に

¹⁴ “Benarkah Polisi Menggalang Dukungan untuk Prabowo-Gibran?,” *Majalah Tempo*, 3 December 2023.
“Saksi Ungkap Polisi Datangi Kepala Desa, Bilang Prabowo Harus Menang Kalau Ingin Aman,” *Kompas.com*, 1 April 2024.

¹⁵ Marcus Mietzner and Jun Honna, “Elite Opposition and Popular Rejection: the Failure of Presidential Term Limit Evasion in Widodo’s Indonesia,” *South East Asia Research*, 31 July 2023.

2024年6月05日

終わった。次に画策したのが、上述のガンジヤル擁立と大連立構想であったが、それも実現しなかった。最後の最後に、息子をプラボウォのペアにして選挙でこ入れをした。結果、プラボウォは一回の選挙で勝利を収めることに成功した。その勝利は同時にジョコウィの勝利でもある。彼は権力闘争を勝ち抜いたと言えよう。しかし、その闘争は民主選挙での政府の中立性を放棄する事態を招いた。その代償は大きい。

大きなダメージを受けたインドネシアの民主政治には、次期プラボウォ政権下で、どのような展開が待っているのか。彼は政権運営についてジョコウィから多くを学んでおり、そのスタイルを踏襲すると思われる。つまり、与党連合を最大限に肥大化し、野党を最小化することで、政権基盤を安定化し、国会運営を意のままにする談合政治である。選挙後は「ノーサイド」だとし、アニス陣営とガンジヤル陣営につく政党と和解交渉を進め、各党に閣僚ポストをオファーし、オール与党に近い政権運営を目指している。その政権は、ジョコウィ時代と同じで、国会での野党勢力が無力なため、政府は高い自由度を持って政策を遂行していくと思われる。それは、行政権力の拡張であり三権分立の形骸化を招くため、「民主主義の後退」という指摘はもつともである。とはいえ、それはジョコウィ時代から続くものであり、プラボウォ政権の誕生が引き金になるものではない。また、言論の自由の侵害を始め、環境保護活動やジャーナリズムの犯罪化も、従来からの傾向であり、それも次期政権で続くであろう。

ただ、パプアでの紛争に対する対応は、より軍事的になる可能性がある。ジョコウィ政権下では、パプアの反政府武力勢力を「武力犯罪集団」と定義し、犯罪対策を前提に法執行機関の国家警察が主体的に対応してきた。ところが選挙後、犯罪集団ではなく「分離主義運動」という概念を国軍は前面に出すようになった。それは、国軍の反乱鎮圧作戦を広域に展開したいという考えを反映しているよう。プラボウォ国防相は国軍のパトロンであることから、その新路線が政権交代を期に前面に出ても不思議ではない。そして、そういう強硬路線に対し、欧米諸国が「自由と民主主義」を掲げて批判する展開は期待できない。むしろ米国や豪州は、共同軍事訓練「ガルーダ・シールド」を通じて、プラボウォ国防大臣を再評価してきた。インド太平洋の安全保障観を共有できるパートナーとして、彼を歓迎するであろう。プラボウォが選挙キャンペーンで主張してきた国防予算の増加も、欧米にとっては兵器セールスのチャンスでしかない。

結局、インドネシアの今回の大統領選挙は、「世界最大の直接選挙」を誇る同国の民主選挙の質を著しく劣化させた。このことは、世界のデモクラシーにとっても残念な現実であろう。しかし、プラボウォ政権下で、民主主義が破壊され専制主義に逆戻りする可能性は低い。むしろ、すでに後退している民主主義を低レベルで維持し、「世論人気イコール民主主義」という矮小化された政治価値を定着させることに、同国の政治エリートの共通利益があるように思える。そして、そのレベル向上に欧米もさほど関心を持たないし、地政学的戦略価値の共有を優先させるであろう。インドネシアは、そういう国内政治と国際政治の新たな均衡点に向かいつつある。